



若鷹だより

高山市立荘川中学校
平成29年7月

自分の思いを精一杯伝える荘川っ子

高山市少年の主張コンクールから

校長 岡本 昌昭

昨年度の4月、大きな中学校からA男さんが転校してきました。今年度、3年生になり、高山市少年の主張コンクールに学校代表として出場しました。彼は、『荘川で学んだこと』と題して堂々と、自分の思いを語ってくれました。



高山市少年の主張大会奨励賞

3年 A男さん

1学年150人以上の中学校から、1学年12人の学校に転校してきた昨年度、不安がいっぱいあったそうです。そして、学校生活が始まって、戸惑うことが多かったそうです。特に驚いたことは、授業と部活、人間関係だったそうです。

授業では、1クラス40人程いたということもあり、一人ひとりが話すことはあまりなく、全員が挙手して発言することは難しく、発表をしなくても授業は進んでいったそうです。よって、積極的に挙手したり発言したりしていなかったそうです。しかし、荘川中では生徒の意識は高く、毎時間全員挙手をして授業に向かっていて、当初、何でそんなに頑張るのか理解できなかったそうです。しかし、「みんなと授業を受けていくにつれ、自分でも手を挙げられたり、仲間と話し合ったりすることができるようになっていきました。今では、挙手することにも慣れてきました。」と話していました。

また、部活は、部の数も多く、曜日ごとで活動できる部活が決まっていたのに対して、荘川中では広いグラウンドが毎日使え、練習の量も大きく変わって大変だったそうです。しかし、先輩、後輩という学年を越えて、アドバイスや声をかけあい関わる部活動は、とても新鮮に感じたそうです。

最後は、人間関係のよさです。京都で生活している時、何にも考えずに友だち同士で、ちょっとした悪ふざけのつもりで、「クソ」や「お前、本当に馬鹿やな」といった言葉も使っていたそうです。しかし、荘川中で、ひびきあい集会に参加して、今までの言動を見つめ直し、人を傷つける言葉を使わず、温かい言葉を使っていこうという話し合いから学んだことがあったそうです。それは、自分が悪ふざけとして、遊びの延長のつもりで使っていた言葉が、人を傷つけてしまっていたということ。今までは、言葉使いについて仲間から注意されたことはなかったということ。しかし、荘川中の仲間は、お互いのために、駄目だと思ったことは言い合うことができるのだと知り、自分自身でも少しずつ、言葉に気をつけて使っていこうと意識するようになったということでした。

一人ひとりが自分の考えをもち仲間と創り上げる授業、先輩後輩みんな頑張る部活動、自分たちの言動を見つめ直し人間関係をよりよくしていこうとする姿など荘川中のよさを、彼から評価してもらえたように思います。

